

## 歳月不待人

さいげつひと ま  
歳月人を待たず



はや、三月に入りました。朝夕の冷え込みも目に見えて緩んで、早咲きの梅も開花し、景色は春の気配を漂わせてきております。さて、今回の禅語です。

さいげつひと ま  
歳月人を待たず...

日本にも、鴨長明の、ゆく河の流れは絶えずして...という名句がありますが、この言葉は、句としては古くから広く人口に膾炙したものの一つです。たとえば、東晋末から南宋にかけての詩人 陶淵明 (365-427) の詩がよく知られています (『五詩源』五古)。

盛年不重來

せいねん  
盛年重ねて来たらず

一日難再晨

いちじつ あした がた  
一日再び晨になり難し

及時当勉励

とき およ まさ べんれい  
時に及んで当に勉励すべし

歳月不待人

さいげつ  
歳月人を待たず

人生の盛りの時期は、二度と帰ってはこない。一日一日は毎日繰り返しているようでも、その一日は、一度過ぎ去ってしまったならば、二度とやり直して始めることはできないのだ。

だから、時を惜しんで勉学に努めなくてはならない。歳月の過ぎ去ることは、人を待ってはくれないのだから...

この語は、特に「禅語」と知られているわけではありませんが、禅の修行現場では特に親しみのあるものの一つです。

禅の修行道場である「僧堂」では、一日のうちに何度も、木製の板が決められた時間に、決められたやり方で打ち鳴らされます。朝の夜明けに修行の開始を告げる「開板」から、「講座」の

開始を告げる板、お昼の板、午後三時の板、夕方の修行を告げる夕開板、坐禅の終わりを告げる板...

あるいは時報のために、あるいは行事の始まりと終わりを伝えるために、季節や修行の日程によってさまざまに変わりながら打ち鳴らされますが、この木製の板、「木板」には、墨痕鮮やかに、このような言葉が書き込まれています。

生死事大 しょうじじだい こういんおしむべし	無常迅速 むじょうじんそく ときひとをまたず
光陰可惜	時不待人

修行僧たちは、朝夕、木板を打ち鳴らす度ごとに、繰り返し繰り返しこの文字を見つめ、時の流れの無常さ非情さと、限られた「いのちの時間」の中で修行することの厳しさを確認するのです。そしてこの時、一番大事なことは、この有限な「いのちの時間」をしっかりと意識することなのです。

それはただ、人生にはやり直しがきかない、時間なんて、あっという間に過ぎてしまうぞ... などということではないのです。惜しいとか、もったいないとか、そういうことでもない... 「時は金なり」という言葉でも、その厳肅さには的中しません。

時を護り大切にすることは、そのまま戴きたいのちを大切にすることにはほかなりません。時もいのちも、ともに時々刻々失われ行き、二度と帰ってはこないもの... 時といのちとは、同じものの示す二つの姿です。一人一人のいのちは、それぞれ一つずつしかなく、一回きりで、儚く、だからこそ尊いものなのです。同じように、その人の生きる時、人生は、一つしかなく一回きりなのです。

この一つしかなく、儚く、一回きりのもの、時の中に生きていくいのちのありさまを「生死」といいます。道元禅師の言う「この生死は即ち仏の御いのちなり...」とは、そういうことなのです。

